

日本語の格助詞表現の意味解釈について

伊藤 健人

キーワード：深層格／意味役割，格の多義性，格解釈における格助詞の役割

1. はじめに

類型論的には、膠着語であり典型的なSOV言語である日本語では、文法関係や深層格（或いは、意味役割）¹の表示に格助詞が深く関与している。従って、典型的には統語的な位置（語順など）によって、文法関係や深層格の解釈がなされる孤立語、SVO言語のタイ語などとは異なり、日本語は、格助詞により形態的に（音形を持って）当該の文に具現化される。日本語では、9個²というわずかな「表層格（格助詞）」がそれ以上の「深層格（意味役割）」の表示に関わっている。日本語における格の意味的な解釈の考察を複雑にしているのは、このような格助詞が文法関係の表示と深層格（意味役割）の表示の両方に関わっているからであると言える。

例えば、(1a)のような典型的な他動詞文では、「ガ」は、主語という文法関係と、動作主という深層格に関係し、「ヲ」は、目的語という文法関係と、対象という深層格に関係している。しかし、(1b)のような可能動詞文では、主語には「ニ」が、目的語には「ガ」が現れ、また、深層格の対象は「ガ」格名詞句となっている。

(1)

a.		太郎-が	古文書-を	読む
	文法関係	主語	目的語	述語
	深層格	動作主	対象	

b.		太郎-に	古文書-が	読める
	文法関係	主語	目的語	述語
	深層格	経験者	対象	

さらに、「太郎が新しいデジカメが欲しい(こと)」のような願望を表す形容詞述語文では、「ガ」は、経験者もマークする。以上のような3つの文だけでも、格助詞と文法関係、及び、深層格の関係は以下のような複雑なものとなる。

文法関係	主語		目的語
格助詞 (表層格)	ニ	ガ	ヲ
深層格	経験者	動作主	対象

さて、ここで注意しなければならないことは、「ガ/ヲ」のような格助詞は、主語、目的語を直接表すわけではなく、また、深層格を直接表すわけでもない、ということである。これを話しことばの例である(2)でみてみよう。

- (2) a. 太郎_φ帰ったよ。 b. もう、お昼御飯_φ食べた？

主語

目的語

<動作主>

<対象>

主語、目的語といった文法関係は、多分に構造的な(統語的な位置としての)ものであり³、格助詞の付加によってどんな要素でも主語、目的語になり得るわけではなく、逆に、話しことばなどでは、格助詞がなくても、どの要素が主語、目的語なのかわかる。また、同様に、深層格の解釈も格助詞によって決定されているわけではないため、格助詞がなくても、深層格の解釈は可能である。

本稿では、格の意味解釈に深く関わっている深層格とその表示に関わる格助詞の役割といった問題について、従来の研究を整理し、今後の課題について述べる。以下、2.では、深層格について検討し、3.では、格の意味解釈における格助詞の役割について考察する。そして、4.では、日本語の格研究における重要課題(解決すべき問題)について述べる⁴。

2. いわゆる「深層格」について

2.1. 格解釈の単位

従来、言語学では広く「深層格(意味役割)」が格の意味解釈の中心的、かつ、最小の単位として考えられてきた。しかし、この深層格は、絶対的なものではなく、直感的に理解されており、非常に曖昧な概念として用いられている(長谷川(1999):36-37、山梨(1994):101など)。

郡司(1997)は、どの動詞がどの深層格をとるのかということについては、必ずしも一貫した基準がなく、またこれらの有限個の少数の深層格ですべての動詞の全ての項の意味を記述し尽くせるのかという問題があるとし、深層格という概念が有効だと考えられてきたのは、Dowty(1989)で述べられている(1)のような性質が成り立つことが暗黙の前提とされてきたからであると述べている(郡司1997: 95. ただし、郡司は、深層格を意味役割と呼んでいる)。

- (3) a.完全性(Completeness) すべての項は何らかの意味役割をもっている
 b.個別性(Distinctness) 一つの動詞の二つ以上の項が同じ意味役割をもつことはない
 c.唯一性(Uniqueness) 一つの項が二つ以上の意味役割をもつことはない
 d.独立性(Independence) 意味役割は動詞によらない
 e.自然性(Naturalness) 意味役割は意味論的に自然なクラスを作る

深層格は、あたかも研究者の間で共通のものがあるかのように用いられているが、その種類・数なども一定したものではない。とりわけ、意味論的な研究、記述的な日本語学の研究では、おびただしい数の意味役割（日本語学では、「深層格」と呼ばれる場合が多い）が設けられている⁵。

2.2. 深層格の再検討

山梨（1994）は、「深層格」は、言葉の記述に広く使われているが、その解釈は曖昧であり、かなり主観的な使われ方をしていると述べ、深層格の概念は、伝統的な記述文法、類型論的な文法研究、生成文法、結合価文法、格文法等の理論的な枠組みにもとづく言語研究において、言語現象、意味現象を規定していくための記述項の一部として使われてきているが、どの分野においても、その概念は曖昧に使われていて、その理論的な位置づけに関する検討は本格的にはなされていないと指摘している。

また、定延（1993）は、山梨と同趣旨の「そもそも深層格がどのような意味を反映し、どのような意味を反映しないかについて明確な決定基準がない」といった問題点を指摘しながらも、深層格は意義ある概念であると述べている。

（4）深層格の意義（定延1993:112;58）

- a. 文間の同義関係や含意関係に関する我々の知識を反映できる。
- b. 述語の意味特性を、述語が要求する深層格（格枠）として捉えられる。
- c. いわゆる格の3原則（単文異格の原則・同格等位の原則・1名詞句1格の原則）を用いて、文の適格性を予測できる。
- d. いわゆる主語選択階層（動作主格＞経験者格＞道具格＞対象格＞…）によって、主語になりやすい名詞句を予測できる。

一方、郡司（1997）では、以下のような問題点が指摘されている。

（5）深層格（意味役割）に関する問題（郡司1997:99;32）

- a. 動詞によらない普遍的な意味役割の集合をあらかじめ規定しておくことは困難である。
- b. 命題的な意味だけでなく、どのような視点で現象を見るかに依存する。
- c. 意味役割と述語の項との一対一対応（個別性と唯一性）が成り立たない場合がある。

郡司（1997）は、このような問題の解決策として、プロトタイプとしての深層格の可能性を指摘し、その一例として、Dowty（1991）での意味論的な深層格の規定を挙げている。

2.3. プロトタイプとしての深層格

プロトタイプ理論は、認知言語学的な研究の基本概念であり、かつ根幹をなすものとされる⁶。ここでは、Dowty（1991）の“Proto-Roles”という考え方を検討したい。

Dowty（1991）では、典型的な動作主性を持つ“proto-agent”は(6)のような意味論的な特徴を持ち、典型的な受動者性を持つ“proto-patient”は(7)のような性質を持つとされる（郡司（1997:99;3,4））。

(6) proto-agent

- a. 事象ないし状態に意図的に関与する。
- b. 意識的であり、感覚を持つ。
- c. 事象や他の参加者の状態変化を引き起す。
- d. (他の参加者に対して相対的に) 移動する。

(e. 動詞によって名付けられた事象と独立に存在する。)

(7) proto-patient

- a. 状態の変化を伴う。
- b. 累加の対象である。
- c. 他の参加者によって引き起こされたことの影響を受ける。
- d. 他の参加者に対して相対的に静止している。

(e. 動詞によって名付けられた事象と独立には存在しない、あるいは全く存在しない。)

郡司 (1997) によれば、Dowty (1991) は、深層格の区別は離散的なものではなく、連続的な性格を持つものとして、その両極端に典型としての “ proto-agent ” と “ proto-patient ” を配置した構成を考えているという。

深層格は、専ら統語論的概念という色合いが強かったが、今後は、意味的・認知的な観点から再検討される必要があろう。

次に、1. で指摘した格解釈における格助詞の役割について考える。

3 . 格の意味解釈における格助詞の役割

3 . 1 . 機能要素 VS 語彙要素

格助詞表現の意味解釈における格助詞の果たす役割に関しては、格助詞を「機能要素 (functional element) 」と見るか「語彙要素 (lexical element) 」と見るかで、大きく二つの異なる立場が考えられる。

一つは、格助詞は機能要素であり、それ自身は特定の意味を持たず専ら文の中において一定の機能を果たすものであるとする立場である⁷。この立場からは、格助詞は、文法格 (構造格) として文法関係の表示 (「ガ」「ヲ」及び「ニ」の一部) や、意味格 (固有格) として自らの持つ固有の意味 (深層格と関係の深い意味) に関わる意味の表示 (「ニ」の一部、及び「カラ」「デ」「マデ」「ト」...) などの機能を担っていると言える。これは主に言語の構造面を中心に研究する際に広く受け入れられている見方であると言える。

これに対し、一方では、格助詞は語彙要素であり、それ自身が特定の意味を持っていると考える立場がある。この立場では、例えば、「カラ」の“ 起点 ” としての意味は、格助詞だけではなく、接続助詞、さらに終助詞と品詞 (カテゴリー) の違いを越えてその意味が持ち越されているという点に注目する。これは、「文法化 grammaticalization/ grammaticization」、即ち、具体的な意味を担う「内容語 (content word) 」から、その意味が希薄になり、より抽象的な「機能語 (functional

ward)」への変化によるものであると考えられている。この考えは、Traugott (1989) などで提案されている「一方仮説 (hypothesis of unidirectionality)」により通時的な観点から裏付けられている。これは、主に認知科学的な言語観に立つ研究者に多く見られる立場と言えよう。

3.2. それぞれの立場の問題点

さて、以上の二つの立場のどちらかを選択する際には、以下のような点に注意する必要があると思われる。

【問題】

- a)なぜ動詞の意味的なタイプの違いによって許される格助詞のメンバーが決まっているのか。
- b)深層格と格助詞の形態は一対一対応ではないが、深層格の表示に際して、なぜいくつかの特定の格助詞が選ばれるのか。また、格助詞の違いが意味解釈の違いに影響を与えるのはなぜか。
- c)格助詞の交替現象（「ガ／カラ」「ヲ／カラ」「ニ／カラ」など）において、交替が可能な組み合わせの一方にいわゆる文法格が多く見られるのはなぜか。
- d)格助詞表現の意味解釈を考える場合、格助詞の意味を詳細に分析することでおびただしい数の意味解釈（あるいは“用法”）の可能性を予測しきれぬか。

まず、a)に関しては、例えば、自動詞を述語とする文では、いわゆる非対格自動詞の「壊れる」でも「窓が（壊れる）」、非能格自動詞の「走る」でも「太郎が（走る）」のように、ガ格しか許さないという事実がある。もし、格助詞が内容語として常に一定の意味を表しているとするれば、非対格自動詞の「窓が（壊れる）」、と非能格自動詞の「太郎が（走る）」に現れるガ格が同じ意味を持つということになってしまう。この点に関しては、上記の格助詞を語彙要素とする後者の立場では説明が困難である。

また、b)に関しては、日本語では、例えば、＜原因＞という深層格はデ格／二格／カラ格で表され、＜着点＞は、二格／へ格で表される⁸。この点で、格助詞は意味格として、自身の持つ意味に関係する意味（多くは深層格に関係するもの）を表す機能を持つという見方もできるかも知れない。しかし、(8)-(10)に示すように、格助詞の違いにより、意味解釈の違いが生じる場合も少なくない。

- | | |
|--|------------------------|
| (8) a. 金をこっ <u>ち</u> に渡せ。 | b. 金をこっ <u>ち</u> へ渡せ。 |
| (9) a. 金を俺 <u>に</u> 渡せ。 | b. ???金を俺 <u>へ</u> 渡せ。 |
| (10) a. プール <u>で</u> 泳ぐ。 | b. *プール <u>を</u> 泳ぐ。 |
| c. プール <u>を</u> { 端から端まで / 一方向に / 400m } 泳ぐ。 | |
| d. ドーバー海峡 <u>を</u> 泳ぐ。 | |

このような問題は、格助詞はそれ自身では特定の意味を持たない機能要素であるという立場には不利な要因となる。

さらに、c)については、格助詞を語彙要素とする後者の立場では説明不可能である。例えば、(11a,b)は、ともに「窓」が＜対象＞という深層格を担っているが、格助詞は「ヲ」「ガ」のように異なったものとなっている。

- (11) a.窓を開ける。 b.窓が開く。
 <対象> <対象>

もし、格助詞を常に特定の意味（ここでは、深層格としての<対象>）を表している語彙要素と考えれば、ともに<対象>となる（11a,b）で異なる格助詞が用いられていることは説明できない。しかし、格助詞「ガ」「ヲ」を文法関係の表示という機能を持つ機能要素と考えれば、(11a)は「目的語」を、(11b)は「主語」を表示しているという説明ができる。

最後に、d)について(12)の例文を考えて見よう。

- (12) a.松葉杖で歩いた。 b.ハイヒールで歩いた。
 c.裸足で歩いた。 d.車の故障で歩いた。

広い意味での深層格としては、(12a-c)は<道具>が、(12d)は<原因>が対応すると思われる。この時点で、格助詞を機能要素とする立場にも語彙要素とする立場にも問題が生じる。まず、格助詞を機能要素とする立場では、「デ」は意味格であり、「デ」が持つ固有の意味に関わる意味の表示という機能を果たしているとするれば、この場合の「デ」の“固有の意味”とは何かという問題が生じる。また、語彙要素とする立場でも同様に、それ自身が特定の意味を持っているのであれば、意味が違う(12a-c)の「デ」と(12d)の「デ」は、「デ₁」「デ₂」の別の語として立てなければならなくなる。さらに問題は複雑で、(12a-c)のうち、(12a)の「松葉杖で歩いた。」は典型的な「道具」であるが、(12b)の「ハイヒールで歩いた。」は「手段」、(12c)の「裸足で歩いた。」は「様態」という解釈のほうがより適切であると言える。こうなると、格助詞が語彙要素とする立場で、仮に意味解釈の違いによって「デ」を別語にした場合でも、「デ₁」「デ₂」に加え、「デ₃」「デ₄」を設けなければならなくなる。

以上のように、上記の問題a)-d)については、格助詞を機能要素とする立場も語彙要素とする立場も満足な説明を与えることはできない。特にd)の問題については、このことが顕著に表れている。これら二つの立場が問題a)-d)を説明できないのは、いずれの立場も格助詞表現における意味解釈を格助詞のみに求めているからである。

格助詞表現は、主に〔名詞句 - 格助詞 - 述語（動詞・形容詞など）〕の複合的な意味によって解釈される。従って、問題とする意味解釈はこの中の格助詞だけ（同様に名詞句だけ、述語だけ）からは説明しきれない。文全体の意味解釈に関わるのは、名詞句／格助詞／述語といった個々の意味的な特徴だけではなく、それら相互の関係など多岐にわたっているのである。

4．格研究の重要課題

4．1．格解釈の多義性

実際の日本語の格助詞を伴う表現（格助詞表現）の意味解釈を考えた場合、例えば(13a-d)のように、2つ以上の深層格に関係していると思われる例は少なくない（山梨(1993など)参照）⁹。

- (13) a.道具 - 場所的：布団にくるまる。ハンケチに顔をうずめる。

- b.動作主 - 起点的：私から太郎に伝えます。お父さんから太郎を叱って下さいよ。
- c.対象 - 原因的：不採用の知らせにがっかりした。友人の病状を案じる。
- d.原因 - 对象的：先輩に遠慮する。その一言に感謝する。

これらの解釈を深層格（意味役割）を用いて記述しようとすれば、多量の深層格を認める結果になるのしかたのないことであろう。

また、一つの格助詞が複数の深層格と関係しているということも日本語における深層格の規定の難しさの原因となっている。例えば、(14a-e)は、いずれも「[名詞]で」という共通の形式を持ち、述語の「殴り合った」という形式も共通であるが、それぞれの解釈は、「場所」「道具」「原因」「主体」「様態」のように違ったものになっている。

- (14) a部屋で殴り合った。... <場所> (仁田1995; 1)
- b.物差しで殴り合った。... <道具> (仁田1995; 2)
- c.遺産相続で殴り合った。... <原因> (仁田1995; 3)
- d.兄弟で殴り合った。... <主体> (仁田1995; 4)
- e.座ったまま / 泥まみれ / 血みどろ / 涙 / 素手で殴り合った。... <様態>

このような例から、従来の研究では、格助詞「で」には、「場所」「道具」「原因」「主体」「様態」などの深層格（意味役割）があるということになるが、問題は、「[名詞]で 殴り合った」という同様の形式から、どのようにして「場所」「道具」「原因」「主体」「様態」などの解釈が導き出されるかである。このような、従来の日本語学的研究に多く見られるような格助詞の形態（表層格）ごとの用法記述（「が」の用法4つ、「を」の用法5つ...など）は問題の解決にはつながらない。また、この方式では、格助詞に無限の用法を認めることになってしまう。

4.2. 分析の方向性

格助詞表現に見られる多義性には、文の構成要素である名詞句 / 格助詞 / 述語（動詞・形容詞など）の多義性と深層格の多義性とが関わっているが、従来の研究の多くは、これらを分けて考えることをしていなかった。格助詞表現が主に[名詞句 - 格助詞 - 述語（動詞・形容詞など）]の複合的な意味によって解釈されることを考えれば、当然、問題とする多義性がどのような意味での多義性なのかを規定する必要がある。少なくとも、名詞句 / 格助詞 / 述語のそれぞれの意味的な特徴は別個に考えなければならない。さらに、文全体の意味解釈に関わるのは、名詞句 / 格助詞 / 述語といった個々の意味的な特徴だけではなく、それら相互の関係など多岐に渡っており、それぞれの要素が影響を与えあっている。

(15) 格助詞表現の意味解釈の決定に関わる諸要素

- a.名詞句の意味的特徴によるもの
- b.助詞の意味的特徴によるもの
- c.述語の意味的特徴によるもの

- d. 名詞句と助詞の相互関係によるもの
- e. 名詞句と述語の相互関係によるもの
- f. 助詞と述語の相互関係によるもの
- g. 名詞句と助詞と述語の相互関係によるもの
- h. 上記以外の言語内の要素（副詞句など）及び、言語外の要素（文脈など）によるもの

格助詞表現の意味解釈では、名詞句や述語などの個々の意味的特徴がそのまま意味解釈に反映されるのではなく、それぞれの特徴が相互に影響を与え合い、文全体の意味となって具現化されているのである。

5. おわりに

本研究では、広範に用いられているにもかかわらず、その概念が曖昧である「深層格」について検討し、同一の形式（表層格）が異なる複数の解釈にまたがる格助詞表現の多義性について概観した。あるひとつの用法は、格助詞のみの意味によるものではなく、当該の文の名詞句や述語などの意味との相互作用によって表されるものである。しかしながら、従来の研究は、格助詞の意味・用法という観点から考察を行っていたものが多い。この問題をより体系的に分析するには、Fillmore(1982)の“Frame Semantics”に見られる背景的な意味を考慮する必要があり、また、Goldberg(1995)の“Construction Grammar”のような構文としての意味という考え方も検討すべきであろう。このような観点からの格助詞表現の意味解釈に関わる研究は、ヒトの事態の捉え方というべき認知のメカニズムに関わるという点で、個別言語としての日本語のみならず、普遍文法の解明にも重要な役割を果たすと言えよう。筆者は、ここでの議論を踏まえ、この問題について、近いうちにより詳細で具体的な考察を行いたい。

《注》

- ¹ 例えば、「動作主：Agent」「対象：Theme」といったものは、「意味役割（semantic role）」や「 θ 役割（ θ -role）」などと呼ばれることが多いが、本稿では、この種概念を、Fillmore(1968)の意味での「深層格（deep case）」で表す。これは、日本語の格研究の場合、深層格の形態的表れとも言える格助詞を表層格として、「深層格／表層格」の方が利便性が高いことによる。
- ² 「ガ」「ヲ」「ニ」「カラ」「デ」「ヘ」「マデ」「ヨリ」「ト」の9種で、「ノ」は除く。
- ³ 主語、目的語といった文法関係の詳細な議論に関しては、郡司(1997)参照。
- ⁴ なお、以下の議論では、紙幅の制約上、文法関係については深く立ち入らない。
- ⁵ 例えば、石綿(1999)では27個、国立国語研究所(1997)では35個もの「深層格」が設定されている
- ⁶ 河上(1996)は、プロトタイプについて、カテゴリーの成員の中でもより中心的で、そのカテゴリーを代表

するもので、カテゴリーはこのプロトタイプとの類似性に基づいて拡張していくと述べている。

- ⁷ ここでの機能が、機能範疇 (functional category) としての文法関係の表示、抽象格の付与、統語的位置の指定等の統語的なレベルでの機能が、より意味解釈と密接に関係する意味論的なレベルの機能かの区別は問題としないこととする。
- ⁸ この場合、真理条件的には同義といえるが、それぞれの形態 (= 表層格) の違いにより、実際の解釈には違いが認められる。
- ⁹ 山梨(1993)では、「一つ一つの格は範疇として独立しているのではなく、その意味役割の機能が部分的にオーバーラップした形で相対的に関連付けられている」とし、一例として、二格の格解釈に関わる「場所格・具格・結果格・原因格・対象格・目標格」による「格のリンク的関連性」を図示している(山梨1993:48)。

参考文献

- 石綿敏雄1999『現代言語理論と格』,ひつじ書房
- 井島正博1999「格助詞あるいは改訂格文法」(『助詞から探る日本文法』),『言語』Vol.28 No.2,大修館書店
- 伊藤健人2001「主語名詞句におけるガ格とカラ格の交替について」,『明海日本語』6号,45-63,明海大学日本語学会
- 井上和子1976『変形文法と日本語(下)』,大修館書店
- 井上和子1980「格助詞をめぐって」,『言語』Vol.9.No.2,20-30.
- 井上和子1989「主語の意味役割と格配列」,久野・柴谷(編)『日本語学の新展開』,79-101,くろしお出版
- 井上和子・原田かづ子・阿部泰明1999『生成言語学入門』,大修館書店
- 河上誓作1996『認知言語学の基礎』,研究社出版
- 郡司隆男1997「文法の基礎概念2 述語と項の関係」,『岩波講座 言語の科学5 文法』,79-118,岩波書店
- 国立国語研究所1997『日本語における表層格と深層格の対応関係』,国立国語研究所報告113,三省堂
- 定延利之1993「深層格が反映すべき意味の確定にむけて」,仁田(編)『日本語の格をめぐって』,95-138,くろしお出版
- 杉本武1986「格助詞」,奥津・沼田・杉本『いわゆる日本語助詞の研究』,227-380,凡人社
- 仁田義雄1993「日本語の格を求めて」,仁田(編)『日本語の格をめぐって』,1-38,くろしお出版
- 仁田義雄1995「格のゆらぎ」,『言語』Vol.24 No.11,20-27,大修館書店
- 長谷川信子1999『生成日本語学入門』,大修館書店
- 益岡隆志・田窪行則1992『基礎日本語文法 - 改訂版 - 』,くろしお出版
- 山梨正明1983「格文法理論」,安井・西山・中村・山梨・中右『英語学大系5 意味論』,467-547,大修館書店
- 山梨正明1993「格の複合スキーマモデル - 格解釈のゆらぎと認知のメカニズム」,仁田(編)『日本語の格をめぐって』,39-66,くろしお出版
- 山梨正明1994「日常言語の認知格モデル(1) - (12)」,『言語』Vol.23 No.1-12(1月号~12月号連載),大修館書店

国立国語研究所(1951)『現代語の助詞・助動詞 - 用法と実例 - 』,秀英出版

Dowty, D. R. 1989. "On the semantic content of the notion of 'thematic role'." in Chierchia, G.,Partee,B. H. & Turner, R.(eds.),*Properties, Types and Meaning*, Vol.II, pp.69-129, Kluwer.

Dowty, D. R. 1991. "Thematic proto-roles and argument selection." *Language*, 67(3), 547-619

Fillmore, Charles J. 1968. "The case for case" in E. Bach & R. T. Harms(eds.) *Universals in Linguistic Theory*. New York: Holt, Rinehart & Winston, 1-88.

Fillmore, Charles J. 1982. "Frame Semantics." in Linguistics Society of Korea (ed.) *Linguistics in the Morning Calm*. Seoul:Hanshin,111-138.

Goldberg, Adele E. 1995 *Constructions: A Construction Grammar approach to argument structure*. Chicago: University of Chicago Press.

Grimshaw, J. 1990. *Argument Structure*. MIT Press.